



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道帝国大学へ進学した東京女子高等師範学校卒業生たち
Author(s)	山本, 美穂子
Citation	北海道大学大学文書館年報, 6, 53-70
Issue Date	2011-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45215
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARHUA6_004.pdf



< 研究ノート >

北海道帝国大学へ進学した東京女子高等師範学校卒業生たち

山本 美穂子

はじめに

近代日本において、帝国大学への女性の入学は、1913年8月東北帝国大学理科大学に正科生（学部学生）として入学した3名（黒田チカ、牧田らく、丹下うめ）をもって嚆矢とする。この3名に続いた者が、1918年北海道帝国大学農科大学へ全科選科生として入学した加藤セチ、1920年北海道帝国大学農学部へ全科選科生¹⁾として入学した本間ヤスである。丹下うめは日本女子大学校卒業生（1904年卒）であったが、黒田チカ・牧田らく・加藤セチ・本間ヤスは、いずれも、東京女子高等師範学校理科の卒業生であった。

帝国大学令（1919年2月6日勅令第12号）に基づく帝国大学や、大学令（1918年12月5日勅令第388号）に基づく官立・私立大学は、男子の高等普通教育機関（高等学校・大学予科）からの進学を前提としており、制度的に女性の入学を想定していなかった。そのようななか、女性が帝国大学へ進学するということは、「高等学校ぬきの不完全なる教育階梯より、ハイジャンプの曲芸」²⁾と称されるほど、至難の道であった。女性が制度的に男性と同等に大学へ入学できるようになるのは1947年教育基本法の公布を待たなければならない。

戦前期、北海道帝国大学では、①1918年9月農科大学（翌年4月農学部と改称）が選科生として、②1930年4月理学部が正科生として、③1943年9月農学部が正科生として、女性の入学を認めた³⁾。東京女子高等師範学校からは、①農科大学・農学部の全科選科生として加藤セチ（1918年3月理科卒業）、本間ヤス（1916年3月理科第二部卒業）が⁴⁾、②理学部の正科生として吉村フジ（1927年3月理科卒業）、金三純（1933年3月理科選科修了）、今井昌子（1936年3月理科卒業）、井上タミ（1942年9月理科卒業）、榎本シヅ（1944年9月理科卒業）が、③農学部の正科生として山西貞（1938年3月理科卒業）が入学している。女性入学者の出身校は、農学部、理学部のいずれにおいても、東京女子高等師範学校が最多を占めた。

筆者は、2005年より、近代日本における女性の帝国大学進学実態の研究調査として、北海道帝国大学における女性の進学事例を中心に、出身校（女子高等師範学校・女子専門学校）側に着眼して、大学進学の実態と背景を調査してきた。本年度は、お茶の水女子大学所蔵資料（お茶の水女子大学所蔵簿書、お茶の水女子大学附属図書館・桜蔭会所蔵『桜蔭会会報』）を調査する機会を得た。そこで、本稿では、調査途次ではあるが、(1) 戦前期

における東京女子高等師範学校の大学進学状況を確認し、(2)次に北海道帝国大学に入学した東京女子高等師範学校卒業生の歩んできた道をいくつか紹介することとする。

1. 戦前期における東京女子高等師範学校の大学進学状況

1-1. 東北・北海道・大阪・名古屋帝国大学への進学状況

東北・九州帝国大学が女子高等師範学校本科卒業生を入学資格者として規程で認めた1920年代以降、帝国大学においては東北・九州・北海道・大阪・名古屋帝国大学の一部の学部が、官立大学においては東京・広島文理科大学が、女性の入学を認めた。東北・北海道・大阪・名古屋帝国大学への東京女子高等師範学校卒業生の入学者数は表1のとおりである。表1中の帝国大学においては、東京女子高等師範学校から、理学部へは数学科・化学科・物理学科・生物学科・植物学科・動物学科・地質学鉱物学科・地球物理学科への入学者があり、法文学部へは文科・法科・経済科への入学者があった。

表1 東北・北海道・大阪・名古屋帝国大学への女性入学者数 (1923～1945年)

大学／入学年	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934
東北帝国大学 法文学部	2(2)	1(0)	5(1)	1(0)	2(0)	3(2)	7(1)	3(0)	2(0)	7(0)	3(0)	5(0)
東北帝国大学 理学部	3(2)	3(1)	3(2)				1(1)		1(0)			
北海道帝国大学 理学部	—	—	—	—	—	—	—	1(1)	2(0)			

大学／入学年	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945
東北帝国大学 法文学部	3(0)	4(1)	4(0)	3(0)	0	3(0)	3(0)	14(0)	10(0)	17(1)	5(0)
東北帝国大学 理学部		1(0)	1(0)		1(0)			1(1)		2(2)	5(1)
北海道帝国大学 理学部	1(0)	2(0)	2(0)	1(0)		1(0)	5(1)	3(2)	1(0)	1(0)	3(1)
北海道帝国大学 農学部									1(1)		1(0)
大阪帝国大学 理学部	1(0)		2(0)			1(0)	1(1)				
名古屋帝国大学 理学部	—	—	—	—	—	—	—		1(0)	2(1)	2(1)

備考 () は入学者内の東京女子高等師範学校卒業生数、内数。学部開学前の年は—を表記した。『北海道大学大学文書館年報』第5号79頁表2のデータを「昭和四年二月 文理科大学入学関係 教務課」(お茶の水女子大学所蔵)より補訂した。なお、九州帝国大学(農学部・理学部・法文学部)については、調査途中で確定数が得られていないため、本表には入れていない。

1-2. 文理科大学への進学状況

東京・広島文理科大学が1929年新設され、女子高等師範学校卒業生が規程で入学資格として認められると、東京女子高等師範学校卒業後の進学先として文理科大学が正規に加わった。「東京文理科大学学則」では、第十八条において、入学資格者を、①高等師範学校文科・理科・体育科卒業者、②高等師範学校元本科卒業者、③高等学校高等科卒業者、④女子高等師範学校文科・理科・家事科卒業者と定めた⁵⁾。広島文理科大学も同様である。お茶の水女子大学所蔵簿書「昭和四年二月 文^{ママ}理科大学入学関係 教務課」に拠ると、文理科大学への東京女子高等師範学校卒業生の志願者数は、表2のとおりとなる。

初年度の文理科大学志願者数が多いのは、男子の高等師範学校が昇格して文理科大学と

なったのに対して、女子高等師範学校の大学昇格がかなわなかったことから、文部省等に対する抗議の意味で、桜蔭会（東京女子高等師範学校同窓会）と佐保会（奈良女子高等師範学校同窓会）が連動して、卒業生から大学志願者を勧誘したことが一因ではある⁶⁾。しかし、このことは東京女子高等師範学校卒業生には男子の高等学校卒業程度以上の学力が十分に備わっていたこと、1913年より東京女子高等師範学校卒業生は帝国大学への進学実績も積み、卒業生には大学進学希望をもつ女性がいたことを示す大きな証でもある。

表2 東京女子高等師範学校卒業者にみる文理科大学志願者数（1929～1945年）

大学／志願年	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945
東京文科大学（理科）	5	2	1		1	5	3		2		1	1	3	6	7	6	1
東京文科大学（文科）	13	1		2		2	5	4		2	3		3	6	4	3	4
広島文科大学（理科）		1			1						1	1					
広島文科大学（文科）			2	1	1							1					
計	18	4	3	3	3	7	8	4	2	2	5	3	6	12	11	9	5

備考 前掲「昭和四年二月 文理科大学入学関係 教務課」より作成。（理科）は理科系学科の、（文科）は文科系学科の総称。

2. 北海道帝国大学へ進学した東京女子高等師範学校卒業生

2-1. 全科選科生としての入学

1918年9月北海道帝国大学農科大学へ全科選科生として加藤セチ（1918年東京女子高等師範学校理科卒業）が、1920年4月農学部へ全科選科生として本間ヤス（1916年同校理科第二部卒業）が入学した。本節では加藤セチと本間ヤスが在学していた1910年代の東京女子高等師範学校の状況を確認し、加藤セチと本間ヤスが北海道帝国大学に入学する前後を中心に紹介する。

（1）1910年代における東京女子高等師範学校理科卒業生の躍進

1913年8月東北帝国大学理科大学に黒田チカ（東京女子高等師範学校理科1909年卒業、当時は同校助教授）と牧田らく（同校理科1911年卒業）が入学した時、本間ヤスは東京女子高等師範学校理科の2年生であった。帝国大学への女性の入学という前代未聞のことに対して、『婦女新聞』（1913年8月22日付）は巻頭論説で「東北大学に入学の三女史に与ふ」と檄をとばし、報道は過熱した。さらに、翌年3月には、東京女子高等師範学校助教授の保井コノが、文部省の海外留学生に、理科研究の目的では女性として初めて選ばれた。保井コノは1902年同校の理科第1回生として卒業後、岐阜高等女学校教諭を務めたが研究心を抑えられず、1905年同校の第1回研究科生として再び入学した。1907年研究科修了後は母校で勤務しながら、植物細胞学の研究を続けていた。「大正の御代に成りまして理科卒

業生の中より昨年は二人までも首尾^{よく}能試験を経て大学に入り、今一人は海外留学を命ぜられ、実には大正は女子の理科に取り、古来稀なる有難き、且芽出度御代と存じます。女子にして大学に入り、女子にして理学研究の為に洋行を命ぜられたる此の二件は本校に於ける否な本邦の女子教育に於ける新記録でありまして、今後本校の沿革史中には必ず物筆せらるゝ事と思はれますのみならず、恐らく我が国の女子教育史中掲載せらるべき事と信じます」⁷⁾と、同校の岩川友太郎教授は理科卒業生の躍進を讃えた。そのようななか、理科に在学し、博物学(植物学)を専攻していた本間ヤスにとって、女性が帝国大学へ進学すること、あるいは女性が植物学者となることは、現実味を帯びて実感できたはずである。

1916年6月、保井コノが米国留学を終えて帰国し、一方では7月に黒田チカが東北帝国大学理科大学化学科を卒業して女性として初の理学士となった。このような東京女子高等師範学校卒業生の目覚ましい活躍のなか、本間ヤスは、1916年3月理科を卒業し、服務規則(教職義務)⁸⁾により群馬県桐生高等女学校で教員を務めながら、ドイツ語の勉強等を進め、大学進学にそなえていった。一方、加藤セチは、1913年山形県女子師範学校を卒業して、同県内で小学校教員に就いたが、さらなる進学を志して1914年東京女子高等師範学校理科に入学、数学化学を専修していた。

(2) 加藤セチの入学

表3 加藤セチ(1893-1989)略年譜

1909年	3月	山形県立鶴岡高等女学校 卒業
1913年	3月	山形県女子師範学校卒業。小学校教員に就く。
1918年	3月	東京女子高等師範学校理科(物理化学選修) 卒業
	4月	北星女学校教員に就く(～1921年3月)
	9月	北海道帝国大学農科大学に全科選科生として入学(～1921年3月修了)
1921年	5月	北海道帝国大学農学部農芸化学科 副手(～1921年12月)
1922年	9月	理化学研究所に研究生として入所(和田猪三郎研究室に所属)
1931年	6月	理学博士(京都帝国大学) 学位論文「アセチレンの重合」
1943年	9月	理化学研究所 副研究員
	12月	理化学研究所 研究員
1951年		理化学研究所 主任研究員(～1954年退職。理化学研究所特別研究室嘱託)

備考 「退職者履歴関係資料」(北海道大学大学文書館蔵)、長島譲『女博士列伝』(明治書院、1937年、60～71頁)、前田侯子「加藤セチ博士の研究と生涯」(『ジェンダー研究』第7号、2004年、106～107頁)等より作成。

1918年7月9日、東京女子高等師範学校の修学旅行団(団長：森岩太郎教授、生徒29名)が、北海道帝国大学の見学に来学した。修学旅行団に同伴して大学参観をした東京女子高等師範学校の同窓生在札者に、加藤セチがいた。加藤セチは、1918年3月27日東京女子高等師範学校理科(物理化学専修)を卒業し、4月8日から北星女学校教員に就いていた。修学旅行団を前に、北海道帝国大学総長佐藤昌介は、「私の大学は大いに門戸を開放いたしますから御希望者は遠慮はいらぬ」と発言した⁹⁾。1913年東北帝国大学理科大学に黒田チカから3名の女性が入学して以来、帝国大学への女性の入学は見られない状況下での発言

であった。

加藤セチは、「佐藤昌介総長が『この学校は決して女子に門戸を鎖すものではない』とおっしゃられた。よしそれではもう一度勉強のやり直しをしようと思ったのはこの時である」と回想し¹⁰⁾、「学長（佐藤昌介総長—引用者）は、ここには女子学生はひとりもないが、別に禁じているわけでもなく、自由に入学できますといわれた（略）すっかり感激して願書を出しました」¹¹⁾とも回想している。加藤セチと同様に、修学旅行団の生徒も、佐藤昌介総長の発言が強く印象に残ったのであろう、生徒の紀行文には次のとおり佐藤昌介総長の発言を裏付ける記述がなされている。

農科大学の事務所に着く、二階に案内されてお茶をいたゞく、大学歴覧表も各自に一冊づゝ下さる、やがて総長の佐藤昌助氏が見えて北海道の拓殖のことのあらまし、大学についての話、これから女子も入学を許しますからなどゝお話しして下さつた、少しも見識ぶられない平民的な先生だと思つた、お年は六十位とお見受けした（傍点は引用者）¹²⁾

加藤セチは早速、北海道帝国大学農科大学（1919年農学部と改称）に出願した¹³⁾。しかし、農科大学は検定試験も行わず、入学不許可を通知した。佐藤昌介総長の意に反して、農科大学の教官の間では、女性の出願は大議論を引き起こしたものと考えられる。「学長室の前に何日も入学許可を求めてすわりこんだ」¹⁴⁾という加藤セチの大学入学に対する強い意志と、教官側からの反発の狭間に立った佐藤昌介は、正科生と同じ講義・試験を受け得る「全科選科生」（全科目履修の選科生）の出願という案を捻出した。9月13日、農科大学教授会は「選科出願ニ関スル件」として、農学科第三部出願の加藤セチへの対処について、女子学生に対する入学の可否は初めてであるから更に委員を設けて熟議するよう決定した。9月18日農科大学教授会では、「女子選科入学ニ関スル件」で、女子の入学は選科生のみに関り正科生は許可しないとの女子入学調査委員会決議の報告をうけ、加藤セチの全科選科生入学許可の可否を協議し、出席者19名中14名の賛成を以て、許可することに決定した。加藤セチは、農学科第三部（植物学・動物学・昆虫学などの講座が含まれる）から同科第一部（農学・園芸学・養蚕学などの講座が含まれる）へ志望を変更し、最終的には、北海道帝国大学農科大学の農学科第一部へ1918年9月全科選科生として入学した。

農学科第一部で園芸学講座星野勇三教授の指導を受けた加藤セチは、正科生同様に卒業論文「林檎の種子発芽に対する乾燥の影響（The Effect of Dry Condition upon the Germination of Apple Seeds.）」を提出して、1921年3月31日全科選科生を修了した。「女子学生の、女子師範の名誉にかけて励みました」とは加藤セチの弁である¹⁵⁾。しかし、入学当初から農学士となることを希望していた加藤セチに対して、農学部は、全科選科修了者が学士を取得する措置（大学予科卒業検定を受験して、正科生に編入し、一学期以上在学して正科卒業証書〔学士〕を取得すること）を施さず、加藤セチは農学士を取得することができなかった。

1921年5月4日、加藤セチは農学部農芸化学教室勤務の副手に採用されたが、同年12月

20日副手を辞職した。その後、東京女子高等師範学の湯原元一校長の紹介により、加藤セチは1922年9月理化学研究所の和田猪三郎研究室に入所した。和田研究室での加藤セチの最初の研究は、台湾から依頼されていた甘蔗に関する研究であったという¹⁶⁾。1931年6月8日、加藤セチは京都帝国大学から、「アセチレンの重合」で理学博士を授与された。

その後も、理化学研究所で研究者の道を歩んだ加藤セチは、吸収スペクトルと分子構造、燃料の燃焼機構、抗生物質等に関する研究に取り組んでいった。



図1 理化学研究所前にて北大生と共に (1936年)
前列右2番目が加藤セチ、中央が辻村みちよ
(『写真集北大百年』掲載写真No505、北海道大学大学文書館蔵)

(3) 本間ヤスの入学

表4 本間ヤス (1892-1959) 略年譜

1908年	新潟県立新発田高等女学校 卒業
1910年	新潟県長岡女子師範学校第二部 卒業
1916年	3月 東京女子高等師範学校理科第二部 (博物学選修) 卒業 桐生高等女学校 教員
1920年	4月 北海道帝国大学農学部 に全科選科生として入学 (～1923年3月修了)
1923年	4月 北海道帝国大学農学部副手 (～1936年3月) 3月 北海道帝国大学農学部嘱託 (植物病理学実験補助、～1938年4月)
1936年	5月 農学博士 (北海道帝国大学) 学位論文「Erysiphaceae of Japan.」(日本産ウドンコ菌科)
1949年	日本獣医畜産大学 教授 (生物学) (～1952年)

備考 前掲『女博士列伝』(202～212頁)、『北大時報』第52号・第100号、『桜蔭会会報』復刊28号等より作成。

1919年2月7日改正帝国大学令の公布があり、4月1日北海道帝国大学に農学部 (農科大学を改称) が設置された。「農学部規程」は「農科大学学則」の選科規定をほぼ踏襲した。1920年9月1日農学部教授会は、6名の全科選科生入学志願者に対する入学許可を審議した。6名の中に、桐生高等女学校教員の本間ヤスがいた。本間ヤスは、1916年3月に東京女子高等師範学校理科第二部を卒業後、桐生高等女学校で博物を担当し、勤務の傍ら桐生高等工業学校のドイツ語教師について語学を勉強し、大学進学へ向けた準備を進めていた¹⁷⁾。

1920年9月農学部に入學した本間ヤスは、農業生物学科の植物学教室に進み、宮部金吾教授・伊藤誠哉教授のもとで、植物病理学を専攻した。1923年3月31日全科選科生の修了に際して、本間ヤスも正科生と同様に、卒業論文を提出した。指導教官の宮部金吾教授は「本間さんは頭脳頗る明晰、今後優良の成績で卒業される事となつた、卒業論文は『粉病

菌科の分生孢子に就て』と言ふのでウドン粉病孢子のピウロンシン体と称する貯蔵物質の化学的成分に関する学術的研究でなかへ立派なものだ」と高く評価した¹⁸⁾。

全科選科生修了後、本間ヤスは1923年4月より植物学教室の副手として在籍し、農作物にとって深刻な病害であるウドンコ菌の研究に専心した。1927年7月5日には産業振興上に貢献のある研究のひとつとして、北海道帝国大学は、本間ヤスの「農林植物ノウドンコ菌ノ研究」を文部省専門学務局長に報告した¹⁹⁾。1933年には、The Proceedings of the Imperial Academy.(帝国学士院の紀要)に、宮部金吾教授の推薦によって論文が掲載されるほどであった(表5)。1936年5月6日、本間ヤスは、「Erysiphaceae of Japan.」(日本産ウドンコ菌)により、北海道帝国大学から農学博士を授与され、その後もウドンコ菌研究の第一人者として研究を続けた。

表5 本間ヤスの主な研究論文一覧(1926～1934年)

(1)	「『カマロスポリウム』に基因する桃樹及梅樹の癌種病に就きて」 (『札幌農林学会報』第18年第81号、1926年11月、63～69頁)
(2)	On the Powdery Mildew of Flax. (The Botanical Magazine, Vol. XLII, No. 499, 1928. pp. 331-334.)
(3)	「ウドンコ菌科に属する菌中に含有せらるる「フィプロシン」体に就きて」 (『札幌博物学会会報』第10巻第1号、1928年4月、47～61頁)
(4)	「禾本科植物寄生ウドンコ菌 生態種ノ統計的研究」 (The Transactions of the Sapporo Natural History Society, Vol. X, No. 2, 1929. pp. 157-161.)
(5)	Homothallism in Sphaerotheca fuliginea (Schlecht.) Pollacci. (The Proceedings of the Imperial Academy, IX, No. 4, 1933. pp. 186-187.)
(6)	A Life-cycle of Sphaerotheca fuliginea (Schlecht.) Pollacci Parasitic on Taraxacum ceratophorum DC. (The Transactions of the Sapporo Natural History Society, Vol. XIII, Pt. 3, 1934. pp. 173-178.)

備考 植物学教室図書室旧蔵論文別刷コレクション(北海道大学大学文書館蔵)より作成。

2-2. 正科生(学部学生)としての入学

1930年4月開学した北海道帝国大学理学部の入学試験は、「北海道帝国大学理学部規程」に則り、2段階で執り行われた。第一次募集は予科・高等学校・学習院高等科卒業生を対象とし(理学部規程第8条)、第二次募集は第一次募集で定員に満たない場合に限って実施された。第二次募集では、①高等師範学校本科理科卒業生、②女子高等師範学校本科理科卒業生、③理科に関する専門学校卒業生、④これらと同等程度以上の専門学校の卒業生、⑤中等学校教員免許状所有者で検定試験に合格した者の順位で入学資格が認められた(理学部規程第9条)。これにより、北海道帝国大学において、理学部で初めて、女性が正科生(学部学生)として入学ができる基盤が整えられた。特に、女子高等師範学校卒業生は第二次募集で第二番目に置かれ、他の女子専門学校卒業生(③、④)より優位な位置付けにあった。

一方、農学部においても、1943、1945年度において、女性2名が正科生(学部学生)として入学した。これは、農学部が1933年から予科修了者の学部進入だけでは定員に満たな

い際に入学検定試験（第二次募集）を実施し、予科・高等学校以外の学歴者（主に専門学校卒業生）の入学を認めていたことを、1943年以降、女性にも適用したためである。

以下に、1930～45年にかけて理学部に正科生（学部学生）として入学した東京女子高等師範学校卒業生5名と、1943年農学部正科生（学部学生）として入学した東京女子高等師範学校卒業生1名について、入学背景とともに、若干の紹介を試みることにする。

(1) 吉村フジの入学

1930年4月北海道帝国大学理学部が開学して、理学部第一期生として71名が入学した。そのなかで女性は1名、吉村フジが入学した。

表6 吉村フジ（1905-1996）略年譜

1923年	3月 北海道庁立札幌高等女学校 卒業
1927年	3月 東京女子高等師範学校理科（博物学選修） 卒業
1929年	1月 北海道庁立札幌高等女学校に教員として勤務（～1930年4月）
1930年	4月 北海道帝国大学理学部植物学科 入学
1933年	3月 北海道帝国大学理学部植物学科 卒業（理学士）
	北海道帝国大学理学部植物学科 副手 札幌市藤高等女学校に教員として勤務
1941年	5月 北海道帝国大学理学部植物学科 助手
1946年	2月 理学博士（北海道帝国大学） 学位論文「浮萍科植物の栄養並びに発育生理学（第1-2）」
1955年	10月 北海道大学農学部農業生物学科 講師（作物生理学講座、～1966年3月）

備考 『北海道帝国大学理学部便覧』、『北大時報』第171号・復刊第19号、1930年4月22日付『北海タイムス』、北海道大学『職員録 昭和四十年』等より作成。

吉村フジは、1927年3月東京女子高等師範学校理科（博物学専攻）を卒業した後、母校の北海道庁立札幌高等女学校に教員として勤務していた。北海道帝国大学理学部の入試情報は、次兄の吉村克二（田所哲太郎教授のもとで農学部農芸化学科副手、1929年10月より理学部開講準備事務取扱）から聴いていたものと推察される³⁰⁾。吉村フジは、1930年度理学部入試における第二次募集に応募し、4月15～17日選抜試験（学術考査）と口頭試問を受け、4月21日理学部植物学科に合格した。吉村フジの理学部入学合格について、1930年4月22日付『北海タイムス』は「エルムの学園 北大理学部にて初咲く紅一点の栄え 見事入試に合格の吉村さん」と題して、写真入りで大きく報道した。記事の中で、吉村フジは、理学部への入学動機を次のように語っている。

女学校を出ました時なんでも好きな事をやりなさいと母に云はれまして女高師に入りました。学校の先生も大分なれまして面白く思ひますが、それにつけてももつと研究を深くしたいと思ひまして、理学部のこちらに出来ましたのを幸ひ志望したわけでございます。丁度私と同じクラスでもう一人東京の文理科大学に入学致しました」（句読点、傍点は引用者）

「私と同じクラスでもう一人東京の文理科大学に入学致しました」とは、東京文理科大

学の生物学科（植物学）に入学した、安部世意治（東京女子高等師範学校理科1927年3月卒業）である²¹⁾。

吉村フジが東京女子高等師範学校に在学した1923～1927年は、「母校昇格運動」（女子高等師範学校を女子師範大学に昇格させる運動）が、桜蔭会（東京女子高等師範学校の同窓会）を中心に展開されていた時期でもある²²⁾。さらに、理化学研究所（1917年設置）が1922年より研究室制度（主任研究員が研究室を主催できる制度。駒場本所以外で各帝国大学に研究室を配置することも可能であった）を開始すると、1922年に加藤セチが和田猪三郎研究室へ、1923年に辻村みちよ（1913年東京女子高等師範学校理科卒業、1920～1922年北海道帝国大学農学部副手）が鈴木梅太郎研究室へ、1924年に黒田チカが真島利行研究室へ相次いで入所し、科学者への道を歩んでいた²³⁾。吉村フジは、東京女子高等師範学校に在学していた頃には、母校卒業生の躍進と母校昇格運動の刺激を受け、大学進学への意識が既に芽生えていたものと考えられる。

そして、1927年3月吉村フジが東京女子高等師範学校を卒業した直後、1927年4月には保井コノが「日本産亜炭、褐炭、瀝青炭ノ構造ニ就テ」で東京帝国大学から理学博士を授与され、日本初の女性博士が誕生した。保井コノに続き、1929年11月には黒田チカが「カーサミンの構造に就て」で東北帝国大学から理学博士を授与されている。女性の理学博士の誕生は、大きな刺激となったはずである。そこへ、地元の帝国大学の理学部植物学科が女性の入学を許可するという状況は、「もつと研究を深くしたい」という向学心を奮い立たせに違いない。

1930年北海道帝国大学理学部植物学科に入学した吉村フジは、植物生理学を専攻し、坂村徹教授の指導をうけた。植物学科の学生の間では、男子学生同士は呼び捨て、先輩の助手は「さん」付けであったところ、吉村フジに対する呼び方は「いつも和服に袴の吉村さんは始から『吉村さん』であった²⁴⁾」という。1933年3月吉村フジは卒業論文「麹菌属に於ける球形細胞形式に就て」を提出し²⁵⁾、北大最初的女性理学士となった。

表7 吉村フジの主な研究論文一覧（1934～1943年）

(1)	Spherical Cell Formation in <i>Aspergillus oryzae</i> with Special Reference to Heavy Metal Impurities in Culture Solution. (Journal of the Faculty of Science, Hokkaido Imperial University, Series V, Vol. III, No.3, 1934, pp.89-99.)
(2)	「くろかびノアミラーゼ並ビニンヴェルターゼ形成ニ及ボス二三重金属ノ作用」 （『植物学雑誌』第51号第605号、1937年、349～355頁）
(3)	「麹菌属ノカタラーゼノ形成ニ及ボス二三重金属ノ作用」 （『植物学雑誌』第53巻第627号、1939年、125～138頁）
(4)	「 <i>Aspergillus</i> ノ数種ニ於ケル液中胞子形成ニ就イテ」 （『植物学雑誌』第53巻第631号、1939年、308～317頁）
(5)	「浮萍科植物ノ生育ニ対スルヴィタミン B ₁ ノ必要性ニ就イテ」 （『植物学雑誌』第57巻第676号、1943年、156～171頁）

備考 前掲の植物学教室図書室旧蔵論文別刷コレクションより作成。

卒業後、吉村フジは理学部植物学教室に籍を置き、服部報公会研究費補助や文部省科学研究費(研究題目「植物ノ炭素及ビタミン代謝研究」)の研究助成を受け、植物生理学分野の論文を発表し、研究者の道を歩んだ(表7)²⁶⁾。1946年2月15日、北海道帝国大学は、「浮萍科植物の栄養並びに発育生理学(第1-2)」において、吉村フジに理学博士を授与した。吉村フジは、北海道帝国大学における女性の理学博士の第一号となった²⁷⁾。



図2 日本植物学会第5回大会にて(1937年7月) 前列右より伊藤誠哉、本間ヤス、吉村フジ、野口ツタ、保井コノ。会場は北海道帝国大学。(大学文書館蔵)

(2) 金三純、今井昌子、井上タミ、榎本シヅの入学

北海道帝国大学理学部が女性の入学を認めた後、他の帝国大学では、大阪帝国大学理学部(1931年開学)、九州帝国大学理学部(1939年開設)、名古屋帝国大学理学部(1942年理工学部より分離独立)が、いずれも入学資格に女子高等師範学校卒業生を記載し、女性の入学を認めた。開学した各帝国大学理学部では、早速、大阪帝国大学理学部で1935年数学科に女性1名(第三臨時教員養成所卒業生)が、九州帝国大学理学部で1942年4月化学科に女性1名(帝国女子薬学専門学校卒業生)が、名古屋帝国大学理学部で1943年化学科に女性1名(日本女子大学校卒業生)が入学した²⁸⁾。そのようななか、東京女子高等師範学校から北海道帝国大学理学部へ入学した女性は、吉村フジの入学以降、1941年4月金三純(1933年3月理科選科修了)が理学部植物学科へ入学するまで見当たらない。一方、1930~1940年にかけて、東北帝国大学理学部(1925年理学部規程を改正し、入学資格に女子高等師範学校卒業生を明記した)でも、1931年化学科に1名(国立北平師範大学卒業生)、1936年生物学科に1名(浙江大学卒業生)、1937年生物学科に1名(奈良女子高等師範学校卒業生)、1939年生物学科に1名(奈良女子高等師範学校卒業生)の女性が入学したが、東京女子高等師範学校卒業生からの入学を見なかった²⁹⁾。表2に見られるように、1930年代、東京女子高等師範学校理科卒業生は、もっぱら東京文理科大学に志願している。地方にある帝国大学(修業年限3年)よりも、東京文理科大学(修業年限4年)は母校に近接しており、環境を大きく変えずに大学教育を受けられる利点が大きかったのかもしれないが、理由は定かではない。

金三純は1909年朝鮮全羅南道潭陽郡昌平面で生まれ³⁰⁾、1933年東京女子高等師範学校理科選科を修了後、1939~41年広島文理科大学の化学科(選科)、東京文理科大学の生物学科(植物学)への出願を経て、1941年4月に北海道帝国大学理学部植物学科へ入学した³¹⁾。

金三純は、理学部学生時代を次のとおり回想している。

理学部に於ける私の学生時代の生活と第一期の吉村様(吉村フジ—引用者)とは切り

離せない程大事な先輩であった。私達二人は同じ方向の北十六条マリア院の方迄其の日の実験についてお話しなどをしながら歩くのであった。（略）真心から尊敬出来る人格の持主であった。私は先生として、姉として、又親友として敬愛して来た³²⁾

理学部植物学科助手として勤務していた吉村フジは、金三純にとって、心強い先輩であったに違いない。

表 8 金三純（1909-2001）略年譜

1929年	京畿女子高等学校 卒業
1933年	3 月 東京女子高等師範学校理科選科 修了
[1939～40年]	東京女子高等師範学校研究科 在学
1941年	4 月 北海道帝国大学理学部植物学科 入学
1943年	9 月 北海道帝国大学理学部植物学科 卒業（理学士）
	12月 北海道帝国大学大学院（応用菌学専攻） 入学
1966年	農学博士（九州大学）
1968年	ソウル女子大 教授（～1974年）
1972年	韓国菌学会会長（～1976年。1976年韓国菌学会名誉会長）
1976年	学術院会員（～1981年。1981年学術院名誉会員）

備考 『北海道帝国大学一覽』昭和十八年、韓国菌学会 HP、韓恵仁氏による調査等より作成。[] は推定。

金三純は植物学科で糸状菌について研究し、糸状菌における Nitrite（亜硝酸塩）の吸収に関する研究で1943年卒業論文を提出した。1943年12月21日金三純は北海道帝国大学大学院に入学し、農学部農芸化学科の半澤洵教授のもとで応用菌学を専攻し、菌学の研究をさらに進めた。その後、金三純は菌学者としての道を進み、「タカラアミラーゼAの光不活性化」（『日本農芸化学会誌』39(1)、1965年1月、10～17頁）、「リボフラビンによるタカラアミラーゼAの光増感不活性化反応」（『日本農芸化学会誌』40(2)、1966年2月、73～79頁）、「紫外線によるタカラアミラーゼAの不活性化反応」（『日本農芸化学会誌』40(2)、1966年2月、67～72頁）を発表して、1966年九州大学で農学博士を取得した。

一方、金三純が植物学科に入学した後、1942～45年北海道帝国大学理学部には、東京女子高等師範学校から、今井昌子（1942年4月数学科入学）、井上タミ（1942年10月地質学鉱物学科入学）、榎本シヅ（1945年4月数学科入学）が相次いで入学した。

今井昌子（1914-1993）は、1914年8月新潟県に生まれ、父の今井才治の転勤（新潟県立佐渡高等女学校教諭から札幌師範学校教諭に転任）にしたがい、1925年渡道した。1931年3月北海道庁立札幌高等女学校を卒業後、東京女子高等師範学校に進学し、1936年3月同校理科を卒業した。その後、母校の札幌高等女学校の教員として勤務するも、向学心が抑えられず、両親の全面的な応援を受け、1942年4月北海道帝国大学理学部へ進学した³³⁾。理学部数学科では、守屋美賀雄教授に師事した。1944年9月理学部数学科を卒業後、同学科の助手として研究を続け、1950年には九州大学に内地研究員として出張し、その後は福岡工業大学において退職まで教鞭を執った。

1942年10月地質学鉱物学科に入学した井上タミは、在学中、後述する山西貞（1942年農学部農芸化学科副手、1943年農学部水産学科入学）と寝食を共にし、学生生活を支え合っ

て過ごした。地質学鉱物学科では鈴木醇教授に師事し、1945年9月同学科を卒業後は、東京大学理学部地質学教室において研究を続けて、「朝鮮福辰山地方の霞石閃長岩質岩石におけるヴェスヴ石の産出およびヴェスヴ石の化学成分と産状との関係一般について」などの岩石学分野の論文を、『地質学雑誌』や The Proceedings of the Japan Academy. に発表した(表9)。その後、十文字高等学校の教員として教鞭をとった³⁴⁾。



図3 今井昌子(自室にて、1941年頃)
(大澤文子氏提供)



図4 1942年理学部地質学鉱物学科
入学記念(1942年10月)
後列右から井上タミ、藤原隆代(大学文書館蔵)

表9 井上タミの主な研究論文一覧(1949~1955年)

(1)	On Porphyroitic Pigeonite in Andesite from Okubo-yama, Minami-Aizu, Fukushima Prefecture. (The Proceedings of the Japan Academy, Vol.25, No.4, 1949. pp.128-132.)
(2)	Amphiboles and Biotites from the Fukushizan Alkaline Complex Korea. (Journal of the Geological Society of Japan, Vol.56, No.653, 1950. pp.71-77.)
(3)	Occurrence of Vesuvianite in Nepheline -Syenitic Rocks of the Fukushinzan District, Korea ; with General Consideration of the Relation between the Composition and Occurrence of Vesuvianite. (Journal of the Geological Society of Japan, Vol.57, No.665, 1951. pp.51-57.) ※A.Miyashiro と共著。
(4)	Unit Cell Dimensions of Synthetic Nepheline. (Journal of Faculty of Science, University of Tokyo, Section II, Vol.IX, Part II. 1954. pp.267-270.) ※A.Miyashiro と共著。
(5)	The polymorphism of corierite and Indialite. (American Journal of Science, Vol.253, 1955. pp.185-208.) ※A.Miyashiro, T.Iiyama, M.Ymasaki と共著。

表10 中西シヅの主な研究論文一覧(1968~1970年)

(1)	Shizu Nakanishi. On generalized integrals, I. (The Proceedings of the Japan Academy, Vol.44, No.3, 1968. pp.133-138.)
(2)	Shizu Nakanishi. On generalized integrals, II. (The Proceedings of the Japan Academy, Vol.44, No.4, 1968. pp. 225-230.)
(3)	Shizu Nakanishi. On generalized integrals, III. (The Proceedings of the Japan Academy, Vol.44, No.9, 1968. pp. 904-909.)
(4)	Shizu Nakanishi. On generalized integrals, IV. (The Proceedings of the Japan Academy, Vol.45, No.2, 1969. pp.86-91.)
(5)	Shizu Nakanishi. On generalized integrals, V. (The Proceedings of the Japan Academy, Vol.45, No.5, 1969. pp. 374-379.)
(6)	Shizu Nakanishi, Kumiko Fujita. On generalized integrals, VI. (The Proceedings of the Japan Academy, Vol.46, No.1, 1970. pp. 41-46.)

1945年4月理学部数学科に入学した榎本シヅ（中西と改姓）は、1939年「抽象空間の研究」で帝国学士院賞を受賞した功力金二郎教授に師事して、積分学を専攻した。1948年3月卒業後は数学教室で雇（1948年3月～）、副手（1948年7月～）として研究を続けた。1949年6月功力金二郎教授が大阪大学へ転出した後は、お茶の水女子大学（東京女子高等師範学校が大学昇格し、1949年5月新設）での講師を経て、大阪大学に助手として赴任した。「Boole 束と集合束」（日本数学会編『数学』5(1)、1953年5月、1～10頁）、「E. R.積分について」（日本数学会編『数学』19(2)、1967年7月、98～102頁）ほか、The Proceedings of the Japan Academy. に論文を発表するなど、積分学分野において世界的に著名な数学者となった（表10）。そして、大阪府立大学教授として教鞭を執って後進を育て、大学教育用テキストとして『積分論』（共立数学講座25、共立出版、1973年）も著した。同テキストは、その後、版を重ねた。



図5 お茶の水女子大学にて（1949年頃）
左端が榎本シヅ（中西シヅ氏提供）

（3）山西貞の入学

表11 山西貞（1916～）略年譜

1934年	3月	東京府立第六高等女学校 卒業
1938年	3月	東京女子高等師範学校理科（物理化学選修） 卒業
	4月	普連土女学校 教員
1941年	4月	東京女子高等師範学校 教務嘱託（化学室勤務）
1942年	11月	北海道帝国大学農学部農芸化学科副手（食品化学）
1943年	10月	北海道帝国大学農学部水産学科 入学
1946年	9月	北海道帝国大学農学部水産学科 卒業（農学士）
		北海道帝国大学大学院特別研究生 入学（～1951年9月）
1951年	10月	東京女子高等師範学校教授（兼）お茶の水女子大学家政学部食物学科助教授
1953年	9月	農学博士（北海道大学） 学位論文「食品の香気に関する研究 特に含硫化合物に就いて」
1961年	10月	お茶の水女子大学 教授（～1982年4月。現在、同大学名誉教授）

備考 山西貞『香りへの道』（山西貞先生退官記念、1982年）等より作成。

1937年5月、東京女子高等師範学校4年生の修学旅行団が北海道帝国大学を訪れた。修学旅行団は、農学部農芸化学科（応用菌学講座）の半澤洵教授、半澤美加夫人（1903年東京女子高等師範学校理科卒業）、農学部植物学教室で研究を続けていた本間ヤス（農学博士、農学部授業嘱託）の案内により、北海道帝国大学のキャンパスと施設を見学した。「農学部ではゲルンジの牛乳を御馳走になりました。この時以来、北大に憧れ、北大に入ること夢みる様になりました」³⁵⁾と、修学旅行団の生徒であった山西貞は回想している。「北大はとにかく広くて、素晴らしい。女高師の小さな建物ばかりのキャンパスとは全然違う」

との好印象は、その後の北海道帝国大学進学への大きな一歩となった³⁶⁾。

山西貞は、1916年7月熊本県熊本市に生まれた。父親の仕事関係で、小学校入学前に家族とともに東京に引っ越し、烏森尋常小学校を経て、1934年東京府立第六高等女学校を卒業、東京女子高等師範学校理科に進学した。東京女子高等師範学校では、3年生で物理化学を選修し、黒田チカ教授（理学博士）に化学を、保井コノ教授（理学博士）に植物学を学んだ。東京女子高等師範学校を卒業後は、奉職義務があるため、同校教諭の紹介により、普連土女学校に赴任した。普連土女学校では化学と数学を教え、教師同士のミーティングでは英語を使用していたので、英語の聞き取りが自然と身についたという。1941年には東京女子高等師範学校化学教室で、実験や授業準備をするなど、黒田チカ教授のアシスタントをつとめていたが、「どうしても北大で学びたい」という進学心は高まる一方であった。そこで、保井コノ教授に頼み、保井コノ教授の愛弟子である本間ヤス（当時は井口ヤス。夫は井口賢三農学部教授）の紹介により、1942年11月北海道帝国大学農学部農芸化学科で副手として身を置くこととなった。農芸化学科では、農芸化学第二講座（担任：高橋栄治教授、食品化学）に所属し、伊藤信夫助教授の下で実験補助などを務めながら、伊藤信夫助教授からビタミンCの研究指導を受けた。



図6 東京女子高等師範学校の修学旅行団（1937年5月、クラーク像の前にて）

2列目左端が半澤美加夫人、2列目右から半澤洵教授、本間ヤス。2列目中央の左隣で帽子を斜めに被っている女性が山西貞。
(山西貞氏提供)

翌年、農学部の入学試験では、戦争の影響もあり、農業経済学科、農業生物学科、水産学科、畜産学科、林学科が第一次募集（予科・高等学校卒業生対象）で定員に満たず、第二次募集（入学検定試験）を実施した。山西貞は「正規の学生になりたい」と思い続け、食品化学に興味を抱いていたため、水産学科（化学専攻）を受験した。受験会場では、女

性は山西貞のみであったという。受験の結果、山西貞は北海道帝国大学農学部に宿願の正科生として入学した（表12）。

表12 北海道帝国大学農学部入学検定試験合格者数（1943年9月14日実施）

学科	検定合格者	出身校の内訳
農業経済学科	3	小樽高等商業学校1、農学実科1、盛岡高等農林学校1
農業生物学科(植物学)	2	農学実科2
農業生物学科(動物学)	2	帯広高等獣医学校2
林学科	7	林学実科4、日本大学予科1、盛岡高等農林学校1、東京農業大学専門部1
畜産学科第一部	8	帯広高等獣医学校4、農学実科2、鳥取高等農林学校1、農学部全科選科生1
水産学科(生物学)	1	農学実科1
水産学科(化学)	4	農学実科2、函館高等水産学校1、東京女子高等師範学校1
計	27	

備考 農学部関係資料（北海道大学大学文書館所蔵）より作成。

水産学科で山西貞は、白濱潔教授（1945年5月空襲により急逝）、小幡弥太郎教授（1946年赴任）の指導をうけ、主に食品の香気に関する研究を進めた。1946年水産学科卒業後は大学院特別研究生に選出され、充実した研究生生活を送った。1951年大学院特別研究生を修了した後は、お茶の水女子大学家政学部食物学科助教授に就任し、家政学部長の辻村みちよ教授のもとで食品の香気に関する化学的研究（ビールの日光臭、醤油の香気などの化学的分析）を進めた。1953年9月12日には、「食品の香気に関する研究 特に含硫化合物に就いて」で、北海道大学から農学博士を授与された。その後、お茶の成分（タンニン）研究の権威であった辻村みちよ教授から「茶の香りの方は（略）その本質はまだ、はっきり判っていないと思う。貴女は北大で匂いの研究をされてきたのだから、お茶の香りについてやって見たら」³⁷⁾とのすすめがあり、山西貞はお茶の香気の研究へ進み、その第一人者となった。

むすび

「食物の中バター、牛乳、牛肉はきらい」³⁸⁾という加藤セチが、佐藤昌介総長の「私の大学は大いに門戸を開放いたしますから御希望者は遠慮はいらぬ」³⁹⁾という発言を受けとめ、北海道帝国大学への入学を諦めなかったのは、「いかなる環境にあつても学問的成長をとめさせたくない」⁴⁰⁾という強い向学心があったからである。

加藤セチは、母校の後輩たちに、「学問に対する態度で、そこには、中休みもなければ隠居もないのです。唯、歩み、があるばかりであります。従つて、このような生長の過程には、時間というものが這入り込む隙間がありません(略)生活の中で、何か専門をもち、或は、何等かの宇宙的なものへの関与を失わないで、一日の中の何時間かを、自分の生長のために没頭して頂きたいと思います」⁴¹⁾と語り、学問への道を説いた。理化学研究所を

退職後の1957年9月、保井コノ、黒田チカをオブザーバーに招き、母校で理科勉強会を主催した加藤セチは、「現代の理科の学問の進め方は、生物と無生物、物理と化学、有機と無機、という風な、セクショナリズムを排して、色々な角度からの共同研究によつて支えられています。それで、各自の専門を生かす道である事を期待し、又、必ずしも、明日の教壇に立つ役に立たなくても、何か宇宙的なものに関与してる事に希望をかけて、一緒に勉強して行きましょう。止めないで勉強して行く事は、山登りのようなもので、決して、楽なコースではありませんが、お互いに手を取り合つて行けば、少し宛でもカーブは上つて行くのではないでしょうか」⁴²⁾と同窓生に呼びかけた。「勉強に始まり、勉強に終わり、そこには、何の雑音もない」⁴³⁾と語る加藤セチにとって、自然科学への探究心が衰えることはなかった。

一方、1943年農学部水産学科に入学した山西貞の旺盛な向学心は、水産学科で副手をしていた前田喜美子に伝わった。山西貞に出会い、前田喜美子は「得難い知己を得、その方の研究への情熱に感染し、研究生活への夢がふくらみ」、1944年10月北海道帝国大学理学部植物学科へ進学し、植物生理学者となった⁴⁴⁾。北海道帝国大学に入学した東京女子高等師範学校卒業生に共通したのは、学問に対する限りない探究心である。

〔注〕

- 1) 選科生は、現在の科目履修生に相当する。全科選科生は、学部学生と同じカリキュラムで、同じ科目数(単位数)を取得したが、検定試験に合格しない限り、「学士」を得られなかった。
- 2) 河崎なつ「断じて母校の昇格を必要とす」(『桜蔭会会報』第92号、1927年7月、3頁)。
- 3) 北海道帝国大学では、医学部(1919年4月設置)において1941年より「専攻生」(学部において特殊事項に就き攻究しようとする者で、大学及び専門学校を卒業している者)として女性(医学士：東京女子医学専門学校出身)の進学があった。また、新制大学の学部を想定して設置した法文学部(1947年4月設置)においては1947年6月正科生として市川三枝(東京女子高等師範学校文科1936年卒業)ら4名が入学しているが、現時点では資料収集の途次にあり、論ずることは今後の課題としたい。
- 4) 「選科生」としては、1927年4月農学部農芸化学科に宇賀神花子(1926年3月東京女子高等師範学校家事科卒業)が選科生として入学し、1930年3月修了している。選科生修了後、宇賀神花子は理学部化学科の副手となって研究を続けた。その後、同学科講師吉村克二の夫人となり1934年5月離職し函館に転居したが、戦後、北海道学芸大学の教官となり、食品化学分野の教育研究に携わった。
- 5) 『東京文科大学東京高等師範学校第一臨時教員養成所一覧』昭和五年度(1930年、27～28頁)を参照。
- 6) 1929年1月29日奈良女子高等師範学校評議会では「東京、広島両高等師範学校ニ来四月開設ノ文理科大学ノ生徒募集広告ガ本月十八日ノ官報ニ掲載サレタニツキ桜蔭会ナリ佐保会ナリ女高師昇格運動ヲ為シツ、アル際ナレバ本校卒業生中ヨリモ相当受験志願者アルヤウニシタシテ心当リノ志望者ニ出願方勧誘スルコト御話アリタリ」と校長から文理科大学への志望者を卒業生中からも勧誘するように指示がでている(校史関係資料1の11「評議会記録 昭和三年四月 教務課」奈良女子大学附属図書館所蔵)。
- 7) 岩川友太郎「保井君の洋行を送る」(『桜蔭会会報』第38号、1914年5月、35頁)。ルビは引用者。なお、保井コノについては、長島譲『女博士列伝』(明治書院、1937年、4～19頁)を参照。
- 8) 女子師範学校、師範学校女子部、高等女学校の教員を養成する東京女子高等師範学校では、本科(理科・文科・家事科)の修業年限は4年、「卒業生服務規則」により、本科卒業後には教職に就く義務

- 年限が課されていた。本科卒業生中、甲種学資支給を受けた者は5年、乙種学資支給を受けた者は4年、私費卒業生は3年であった（『東京女子高等師範学校概覧 大正三年三月』前掲『桜蔭会会報』第38号、48頁）。
- 9) 佐藤昌介「戦後の教育」（『北海道教育』第2号、1918年9月15日発行、20頁）。
 - 10) 加藤セチ「北大最初的女子学生としての感激」（『札幌同窓会誌』第2号、1967年12月、55頁）。
 - 11) 『荘内日報』記事、『三川町史』（1974年、962頁）から重引。
 - 12) 母校生徒有志「北海道及東北地方修学旅行記」（『桜蔭会会報』第54号、1918年11月、41～42頁）。
 - 13) 以下、加藤セチの出願から入学許可までの過程の詳細は、拙稿「佐藤昌介の女子高等教育論——北海道帝国大学における女性の入学をめぐる——」（『北海道大学大学文書館年報』第3号、2008年、18～42頁）を参照されたい。
 - 14) 前田侯子「加藤セチ博士の研究と生涯」（『ジェンダー研究』第7号・通巻24号、2004年、88頁）。2002～03年、前田侯子が山本喜代子から聴き取った談話。
 - 15) 前掲『荘内日報』記事。
 - 16) 『桜蔭会会報』第141号（1931年8月30日、22頁）。理学博士取得祝賀会における加藤セチのスピーチから。
 - 17) 前掲『女博士列伝』203～207頁。
 - 18) 1923年3月31日付『小樽新聞』。
 - 19) 1927年7月5日付「産業振興上貢献アルヘキ研究事項報告ノ件」（『庶務綴 昭和二年』北海道大学大学文書館所蔵）。
 - 20) 後年、吉村フジは「田所哲太郎先生が女子にも門を開くことに積極的だったそうです」とも回想している（林恒子「大学教育への挑戦」札幌女性史研究会編『北の女性史』北海道新聞社、1986年、69頁）。なお、北海道女性史研究者の林恒子氏は、同書執筆のため、吉村フジに往復書簡で聴き取り調査をされた。
 - 21) 「文理科大学入学者氏名及学科（東京）」（『桜蔭会会報』第124号、1930年3月、4頁）。
 - 22) 『桜蔭会会報』を参照。「女子高等師範学校を女子師範大学とする必要」（第79号、1925年5月30日）、「断じて母校の昇格を必要とす」（第92号、1927年7月9日）など、大学昇格運動の論説と経過が会報に逐一報告されている。桜蔭会では母校昇格準備委員会も設けて、準備資金も募り、大学昇格運動を進めていた。
 - 23) 辻村みちよについては、辻村みちよ「理化学研究所時代の思い出—ビタミンCと緑茶、タンニンの結晶—」（『桜蔭会会報』第57号、1967年10月20日、3頁）に本人の回想が載っているほか、『辻村みちよ資料目録』（お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、2003年）に詳しい。
 - 24) 芳賀恣「第一期三年の回想」（『北大理学部五十年史』1980年、67頁）。芳賀恣と同じく、理学部植物学科第1期生の明峯俊夫は「東京女高師からというのは北大創基以来はじめての女子学生として歴史に残る存在で、私達は北大初の男女共学の体験者として鼻を高くしたものである」（『植物学科の夜明けのころ』同上書69～70頁）と述べている。
 - 25) 1933年3月31日付『北海タイムス』。
 - 26) 東京文理科大学へ進学した同級生の安部世意治も、吉村フジと同じく、菌類の研究者となった。表7の論文(5)では、実験植物の入手等の研究協力につき、吉村フジから安部世意治へ謝辞が述べられている。
 - 27) 前掲『北大理学部五十年史』掲載の「学位録」（455～495頁）を参照。
 - 28) 『九州帝国大学一覧』、『九州大学七十五年史』別巻（1992年）、『九州大学理学部同窓会名簿』（1966年）、『大阪帝国大学一覧』、『大阪大学二十五年誌』（1956年）、名古屋大学大学文書資料室調に拠る。
 - 29) 東北大学史料館調（永田英明氏による）、『桜蔭会名簿』（2002年）を参照。
 - 30) 金三純の兄弟（金洪鏞、金汶鏞、金星鏞）は、皆、政治家となった。
 - 31) 前掲「昭和四年二月 文理科大学入学関係 教務課」を参照。
 - 32) 金三純「十二期の思い出」（前掲『北大理学部五十年史』337頁）。

- 33) 大澤文子氏 (今井才治・マス夫妻の次女) からの聴き取り調査に拠る。
- 34) 大森昌衛氏からの聴き取り調査に拠る。
- 35) 山西貞「北大と私」(『札幌同窓会誌』第5号、1979年、49頁)。
- 36) 以下、主に、前掲「北大と私」(49～51頁)、山西貞「私の北大学生時代」(『札幌同窓会誌』第17号、1995年、95～96頁)、山西貞『香りへの道』(山西貞先生退官記念、1982年)、山西貞氏 (現お茶の水女子大学名誉教授) からの聴き取り調査に拠る。山西貞氏からは、山西貞「薫風インタビュー お茶の世界に魅せられて」(『AROMA RESEARCH』Vol.6 No.3、2005年、30～35頁)、山西貞「お茶と私」(『北海道大学東京同窓会会報 FRONTIER』第16号、2001年、30～31頁) など一連のエッセーもご提供いただいた。
- 37) 前掲『香りへの道』17頁。
- 38) 「われらの中の博士たち (その一)」(『桜蔭会会報』復刊第28号、1960年7月、5頁)。
- 39) 前掲『北海道教育』第2号、20頁。
- 40) 「桜蔭会新入生歓迎新年会—昭和三十年一月二二日—」(『桜蔭会会報』復刊第9号、1955年3月10日、1頁)。
- 41) 加藤セチ「若い世代の会員に (其の一)」(『桜蔭会会報』復刊第21号、1958年10月、3頁)。
- 42) 加藤セチ「一緒に勉強を 理科勉強会より」(『桜蔭会会報』復刊第18号、1957年12月、3頁)。
- 43) 加藤セチ「理科ゼミナール便り (SK生)」(『桜蔭会会報』復刊第19号、1958年4月、3頁)。
- 44) 佐々木喜美子「退官にあたって」(『北海道大学理学部同窓会誌』第24号、1982年、10頁)。

【謝辞】

資料調査・聴き取り調査にあたり、2005年度より多くの皆様にご協力いただいている。山西貞氏 (お茶の水女子大学名誉教授)、中西シヅ氏 (大阪府立大学名誉教授)、大森昌衛氏 (麻布大学名誉教授)、林恒子氏、秋山雅彦氏、大澤文子氏、竹田淳子氏、芝田和子氏、唐澤隆三氏、中山久子氏、溝口百合子氏、韓恵仁氏、米田俊彦氏 (お茶の水女子大学)、永田英明氏 (東北大学史料館)、名古屋大学大学文書資料室、桜蔭会の皆様に厚く御礼を申し上げます。

(やまもと みほこ／北海道大学大学文書館員)